会越の春スキー

浅草北岳／守門大岳（2024/4/6-7）

Ｌ：Ｔ野、Ｉ埼、Ｙ科、Ｔ山、Ａ原、Ｈ口

Ⅰ.浅草北岳

大白川駅に停まっている只見線を目にして、さらに国道 252 号線を進んで行っても周囲に見える山々の斜面には雪が少なかった。まだ 4 月も始まったばかりだというのに。下の方で板を担ぐことにならなければいいのだけれど。

浅草山荘に着くと停まっている車は 2 台ばかり。あまりこっちには人が来ないのだろうか。
朝食と準備を済ませ、ビーコンチェックをして 7:00 スタート。取り付きの尾根はツリーポットが大きく、雪面には小枝が散らかっている。
1 時間弱上がるとようやく視界が開けてきた。朝方は薄曇りだったが予報通り晴れてきて薄青い空の下に白い山々が見えた。
900m くらいから痩せ尾根となる。左側にはクラックが走る所もありいやらしい。帰りもここを通るのかと思うとちょっとげんなりする。ムジナ沢を挟んで左に見える浅草岳へと続く尾根に 6 人くらいが歩いていた。あちらの方が歩きやすそうだな。

1,100m に差し掛かった辺り、Ｔさんのスピードが落ちていたので待つことにした。追いついたＴさんによると足が靴に当たって痛いらしい。
「アタシ途中で止めるかも」と言っていたが、少し休んで様子をみようということで長めの休憩を取ることにした。
そこへ柴犬がやって来た。ツボ足の主人を先導するかのように元気がいい足取りで。Ａねーさんが「レロレロレロ…」とあやして撫でていると、追いついた主人が「もう行かせてもらうよ」と促して先へ歩き出した。

1,200m まで上がると尾根筋が広くなった。台地が広がると気持ちも大きくなる。右前方に目指す北岳山頂も近くなってきた。
最後の山頂への上り。ここでも斜面にクラックが所々走っていた。下る際に気を付けなければならない。

11:30、1,472m の浅草北岳の山頂に到着。隣の鬼が面山がすぐ先にある。少し遅れてＴさんも無事山頂に着いた。昨日がＴさんの誕生日だったので
「●歳初の登頂おめでとう！」ということになった。

山頂で休んでいると 4 人組が上がって来た。三条から来たそうだ。2 時間で来れるのでよく来るらしい。彼らもいい歳のパーティーだった。

30 分ほど過ごして滑降に入る。上って来た斜面を下って行くが先ほどのクラックには要注意だ。もし横切ったとしても入射角だけには気を付けなければならない。
雪は少し湿り気があった。もうちょっといい雪を期待してたんだけどなぁ。
「いい雪滑るんだったらあと 1 時間早く着かないとダメだな」とＴさんも言った。

先ほどの 4 人組が山頂から滑り出した。僕らのルートより向かって右を下りて行く。ただし下までは下りず、途中からぐいっと曲がって僕らと同じルートに戻って来た。よく来るだけあって良さそうな斜面をよく知っている。

例の痩せ尾根に出ると慎重に下りなければならない。T 野さんが先導してくれるが、クラックを避け、尾根の左斜面を木々の間を選びコントロールして少しずつ行かねばならない。我慢の下降が続いた。
900m を切った所から上りのルートを離れ、尾根の右側の斜面へ下りて行く。ここへ来て雪の状態も良くなり、木々もまばらでやっとストレスの無い滑りが出来た。
「久々の大ザラメだな」と I 崎さんからも笑みがこぼれる。

後は地図で位置を確認しながら下り、13:30、浅草山荘まで戻って来た。シールがシャバシャバに濡れていたのでここで温泉に浸かっている間、陽だまりに干して乾かした。

すっかりお腹が減っていたのでT野さんが案内する店へ向かったのだが、只見線沿線のその店は昨年『呑み鉄本線日本旅』で紹介された店だった。六角さんのサインも貼られてあり、ボリュームたっぷりお腹いっぱいとなった。
そして今夜の宿探し。Aねーさんの勘を使って探してもらったのだが、ちょうど北陸応援割が適用され素泊まり 2,200 円で泊まれることになった。これはありがたい。なぜならその後、買い出しに行くと、ちょうど割引分がまるまるお酒代に代わってしまったのだから。

Ⅱ. 守門大岳

今日は守門大岳へ向かう。スモンいっくもん。
6 時前に二分の駐車スペースに着くと、既に結構な台数の車が停められていた。雪が少ないからスキーヤーは雪がある所に集中してしまうわけだ。
6:10、出発。ほとんど平らな雪面を川に沿って歩いて行く。

ところが 30 分歩いた所で行こうと思っていたルートの雪が切れていて先へ進めなくなった。すぐ前を歩いていた黄色と青の二人組が引き返して行った。
迂回する林道を行けば時間は掛かるものの上に行けるが、僕らは取り敢えず引き返しながら上がりやすい所を探すことにした。
T 野さんが目を付けたのは地図上では崖マークの所。板を外して泥の斜面を 20m くらい上がった。雪がつながった所で板を履き、沢沿いのルートを再び進む。
しばらくして橋が出てきて林道とぶつかった。帰路は時間掛かっても林道を回って帰ろうねと話しをした。

あまり高低差が無く延々と続くルートを 1 時間近く歩いていた。
「飽きちゃった…」とAねーさんが漏らした。何か気持ちがそれに引きずられ気だるくなってきた。守門大岳もかなり遠くに見える。他のメンバーの足取りも何だかやる気無さそうに見えてきた。そんな中、トップを行く I 崎さんの足取りだけがスッスッと前に出ていた。

やっと小屋らしきものが見えてきた。あそこで一休みだと思ったが、Ｉ崎さんは止まらない。「え～？！」それは新しくできた小屋のようだった。そこから少し下った所に保久礼小屋があった。さすがにそこでＩ崎さんも止まってくれた。8:20 だった。
ザックの上に腰を下ろして休んだ。
「疲れましたねぇ。」
「まあ、ここまでがアプローチみたいな感じだからねぇ」とＴ野さんが答えた。

尾根は小屋の前から伸びている。リフトサポートを上げて斜面に取り掛かると先ほどまでの気だるさは消え、再び調子が上がってきた。
30 分ほど上がった所でＴさんが足の痛みに耐えられなくなって離脱すると言ってきた。保久礼小屋の上の新しい小屋の前で待っているということだ。
さらにキビタキ小屋まで上がった所でＹ科さんが体調不良で離脱すると言う。
「一人抜け、二人抜け、…次はアタシかな」とＡねーさんが口にしたが誰も取り合わなかった。

尾根は一本調子の上りだが、狭くなく昨日の痩せ尾根のようなストレスは無い。
1,100m まで上がると周囲の景色が見えてきた。昨日眺めた山々を違う場所から眺めるのも面白い。

途中で一本取って山を眺めているとツボ足で上がって来た集団が右の方に見えるあの山は何かと聞いてきた。Ｔ野さんが
「おそらくあれが平ヶ岳」と答えると、じゃああれは、あっちはと次々聞いてくる。
「あっちは尾瀬燧、…おそらくだけどね」とＴ野さんは根気よく付き合った。

もうひと上りすると尾根は平たく広くなり山頂への斜面が見えてきた。山頂へ向かう人たちが何人も見える。

10:25、山頂に到着。来ちゃったなぁ。真っ白な世界。天気も最高！
右に伸びる稜線の先に守門岳の主峰がある。そこまでの間に雪庇が見えていたが
「東洋一と言われる大雪庇も雪が少なくてあんなだよ」とＩ崎さんが嘆いていた。

下りは北に延びる稜線をトラバースして隣の 1,388m ピークからの尾根を滑ろうとしていたが、山頂から斜面を眺めたＴ野さんは
「あっちへ行かずにこの畝を越えた辺りから滑りませんか」と提案した。
そしてドロップイン！ザーッ、ザーッ、…広さといい斜度といい気持ちの良い滑りが板からも感じられる。いいねぇ！
200m 下った谷筋からシールを付けて向かいの尾根へ上り返す。キックターンで折り返し、滑って来た斜面が目に入ると僕らのシュプールが刻まれている。
「我々の滑った跡が見えるね」とＴ野さんも気が付いたようだ。
「いい所を滑ってきましたね。」

尾根に乗ってからは保久礼小屋を目指して下りて行く。最初は軽かった雪が途中から急にズンと重くなったが雪に変化があるのも山スキーだ。
最後は樹林帯を丁寧に下りて 11:55、保久礼小屋の下に出た。先頭のＴ野さんが新しい小屋まで上がると 3 時間待っていたＴさんとＹ科さんは帰路を歩き始めた。

往路も退屈した長峰のゆるく長い尾根。
「ナガミネとはよく言ったもんだね」とＴ野さんでも言い出す始末。

林道の橋の所まで来た。往路は泥の斜面を上がったが帰路は林道を回って行こうと話していたが、林道があまりに平らに見えるのでどうしようかしばらく迷った。そこへ朝見かけた黄色と青の二人組がやって来た。彼らは往路を林道から回ったようで「手漕ぎしなくちゃいけないけど雪はつながっていますよ」と言って林道の方へ向かって行った。それで僕らも付いて行くことにした。

林道は大きく迂回していて、広く白い台地を横切って行く。それは上りの斜面から絵本の村みたいに見えた台地だった。聞いた通り手漕ぎと歩きで平らな台地を進んで行く。まあ承知の上だ。最後だけショートカットしてやっと朝通った所まで出られた。穴ボコがある所に気を付けて 13:00、駐車スペースまで戻って来た。やはり人気のエリアらしく道路には縦列駐車で何台も車が停められていた。

この後、すもん温泉に立ち寄った。肌にぬめる感じで効能がありそうなお湯だった。その後、どこか食べる所を探しながら帰ろうということになり、車を走らせて行くと白い越後駒ケ岳、中ノ岳、八海山が目に入ってくる。上からだと山塊に紛れて眺めた越後三山だったが、下からだと一つ一つがそれぞれ主張するかのように聳えている。

小出インターの近くまで来るとラーメン屋の看板が見えた。
「Ｔ野さん、きっとあそこに入るぞ」というＩ崎さんの予想通りＴ野車は左にウインカーを出して曲がって行った。

（Ｈ口　記）